



高度外国人材の誘致を目指した複合研究施設の提案

ー滋賀県大津市琵琶湖湖畔における滞在型学術交流施設の設計ー

近年、各産業の現場において人材不足が深刻化しており、2016 年度の上位企業の多くは中国・米国資本の企業であり、日本の企業は上位 50 社にも入っていない。この打開策として、政府は高度外国人材の受け入れを積極的に進めている。しかし、優秀なエンジニアは、より高給な国外の大手企業へと就職してしまい、日本への定着が難しい状況となっている。

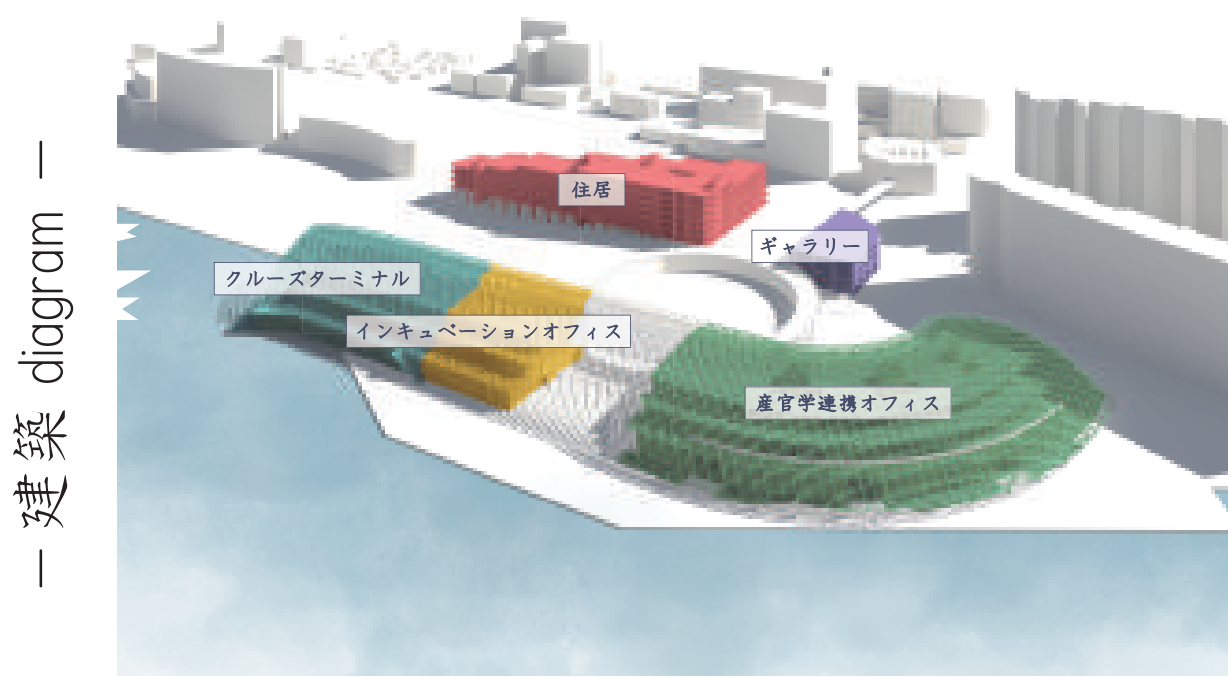
このように、高度外国人材の誘致が難しくなっている今、政府は留学生 30 万人計画など、労働人口の減少を補うための留学生誘致政策を進めている。しかし、その所属先が日本語教育機関や専門学校へと偏ってしまっている。将来、日本の産業を担うであろう優秀な人材に就職先の国として選ばれるためのインセンティブを打ち出すことが求められている。

そのインセンティブの一つとして考えられるのが日本の文化を生かしたウェルネスオフィスである。今日、人間自身の健康の改善に注目が集まっており、利用者が健康であり続けることこそ、これからの建物に求められることであると認識され始めている。これは研究空間においても同様で、従来のような様々な研究内容に対応するための均質な空間ではなく、外部環境の変化を取り入れた、人間らしく健康的な労働環境が必要とされている。

そこで本提案では、自然と共生する日本らしい生き方に着目した。留学生を含めた高度外国人材を対象とし、琵琶湖の美しい風景や温暖な気候を取り入れた研究施設を提案する。

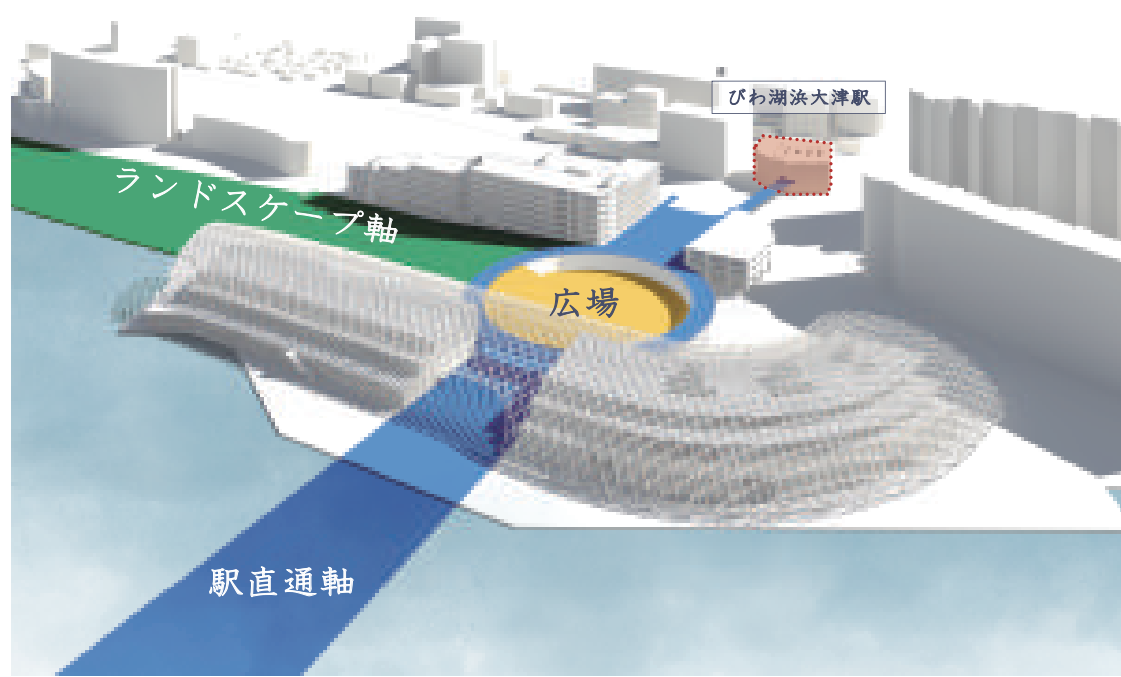
04. 建築計画

[それぞれの機能による施設配置]



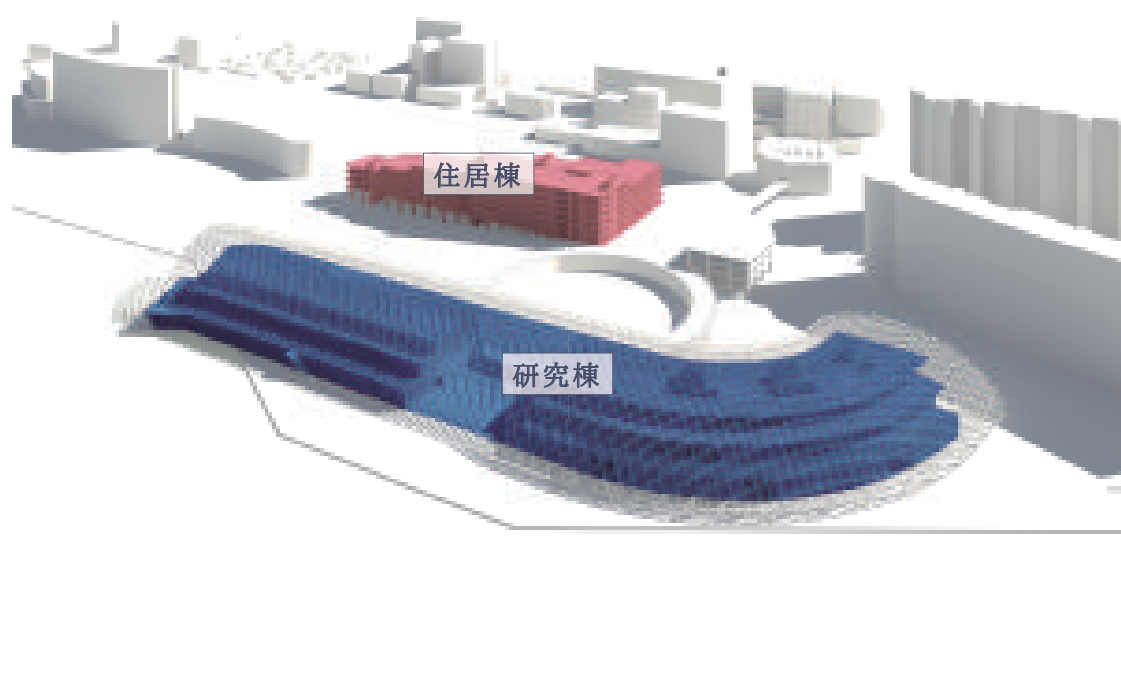
5つの機能ごとにそれぞれ配置する。明確に機能で施設配置することで、セキュリティ、公私の切り替え、観光客と研究者の距離感など、互いの距離感を適度に保つ。

[ランドスケープ軸と駅直通軸を引き込んだ配置計画]



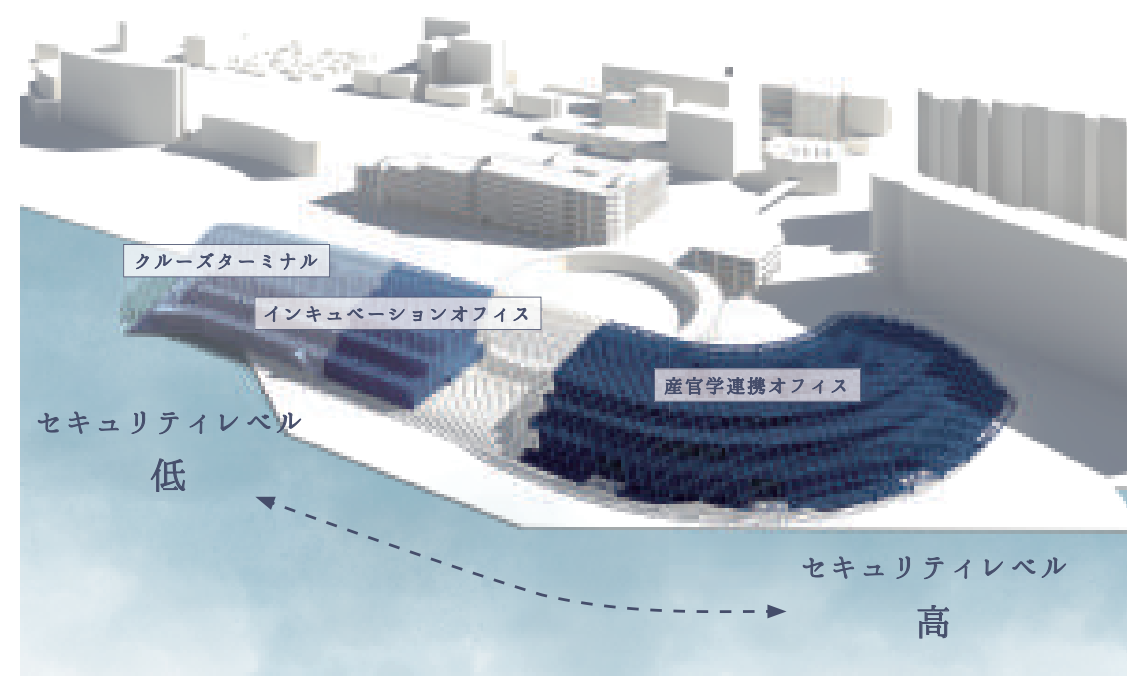
地域住民の憩いの場となっている緑のランドスケープと、びわ湖浜大津駅から直通の軸線を建築に取り込むことで、高度外国人と地域住民との日常的な接点を生み出す。

[研究棟と住居棟の明確な分離]



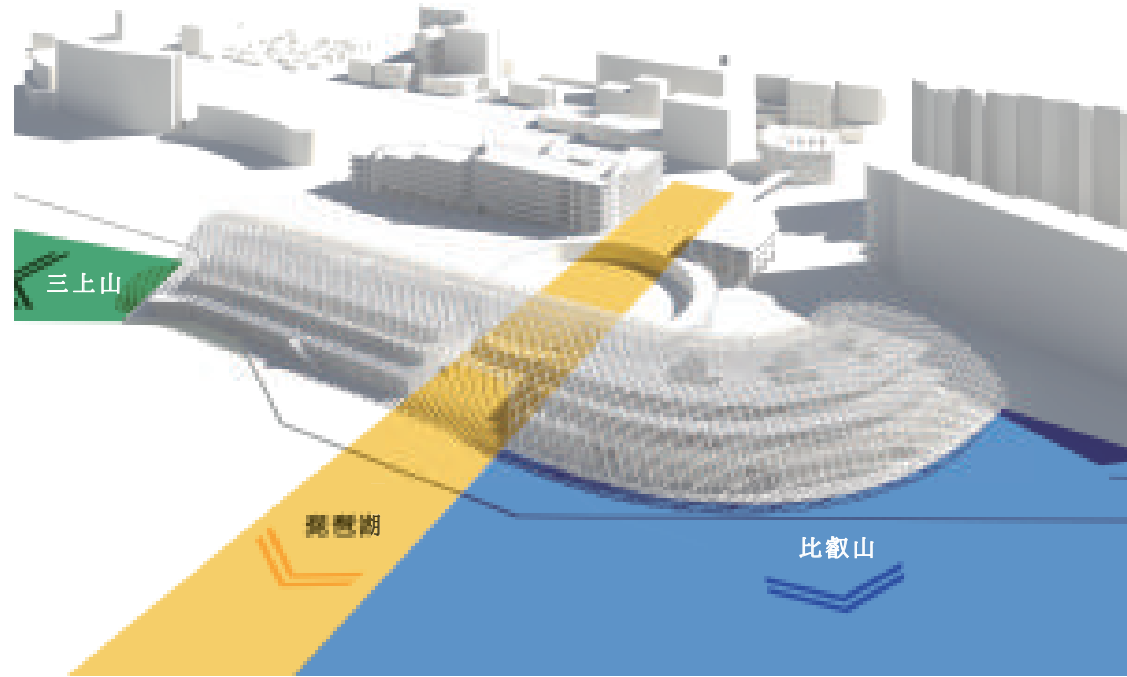
住居棟と研究棟を対角線上に配置することで、仕事とプライベートの分散を図る。十分な採光を確保するために南側に住居棟を配置し、逆に北側には、安定した採光と琵琶湖への景観を取り入れるため、研究棟を配置する。

[セキュリティレベルによる研究棟配置]



ランドスケープ軸の最奥部に産学連携のオフィスを配置し、インキュベーションオフィス、クルーズターミナルを順に配置する。明確に区切ることで安全な研究環境を提供する。

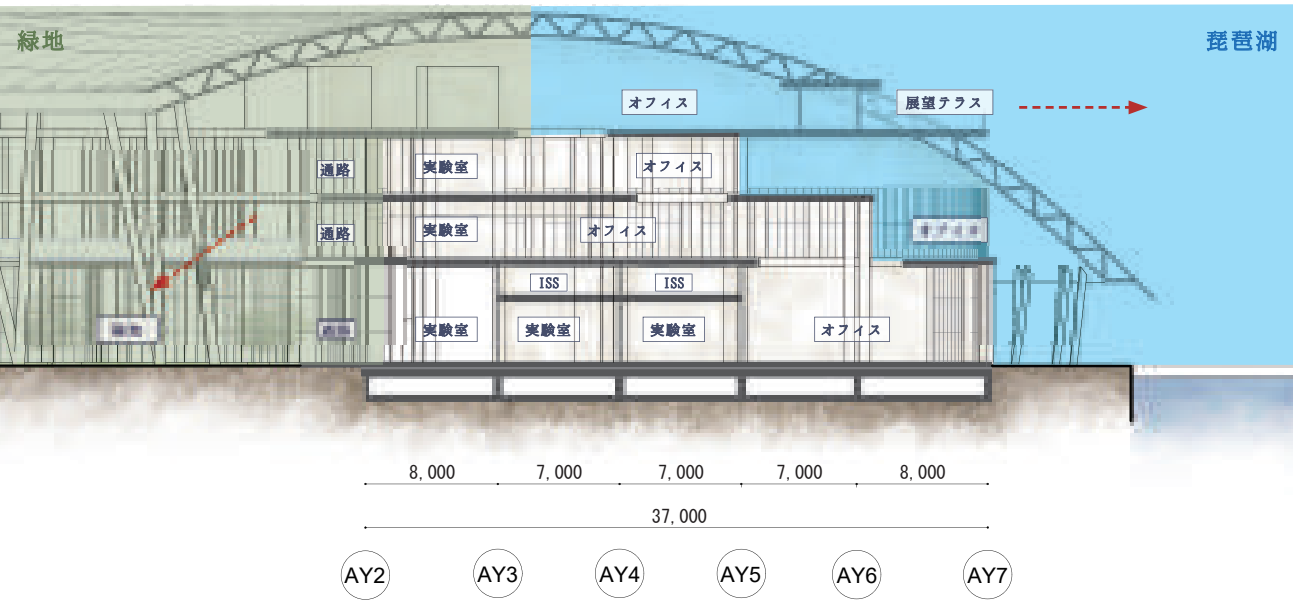
[周囲の景観を取り入れた建築形態]



この研究棟では、琵琶湖側の景観を取り入れるように設計する。美しい円錐状のシルエットをもつ三上山と古くから信仰の対象とされてきた比叡山、日本最大の面積を誇る琵琶湖に対して施設の形状を決定する。

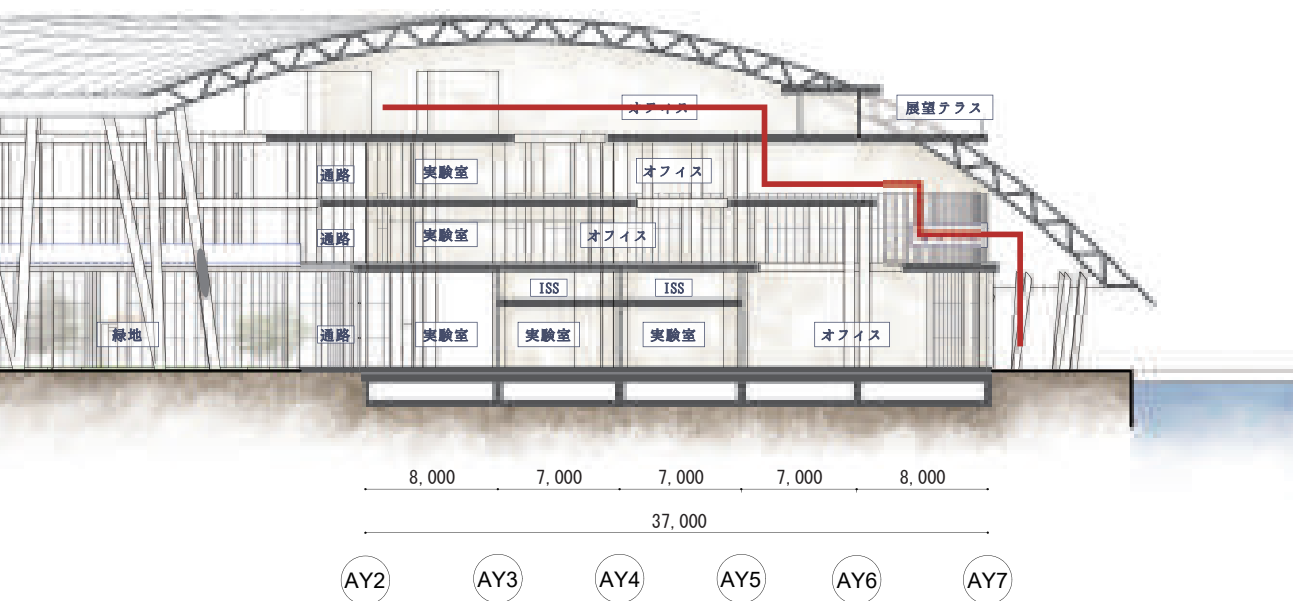
ー断面計画ー

[琵琶湖と緑地に開かれた研究環境]



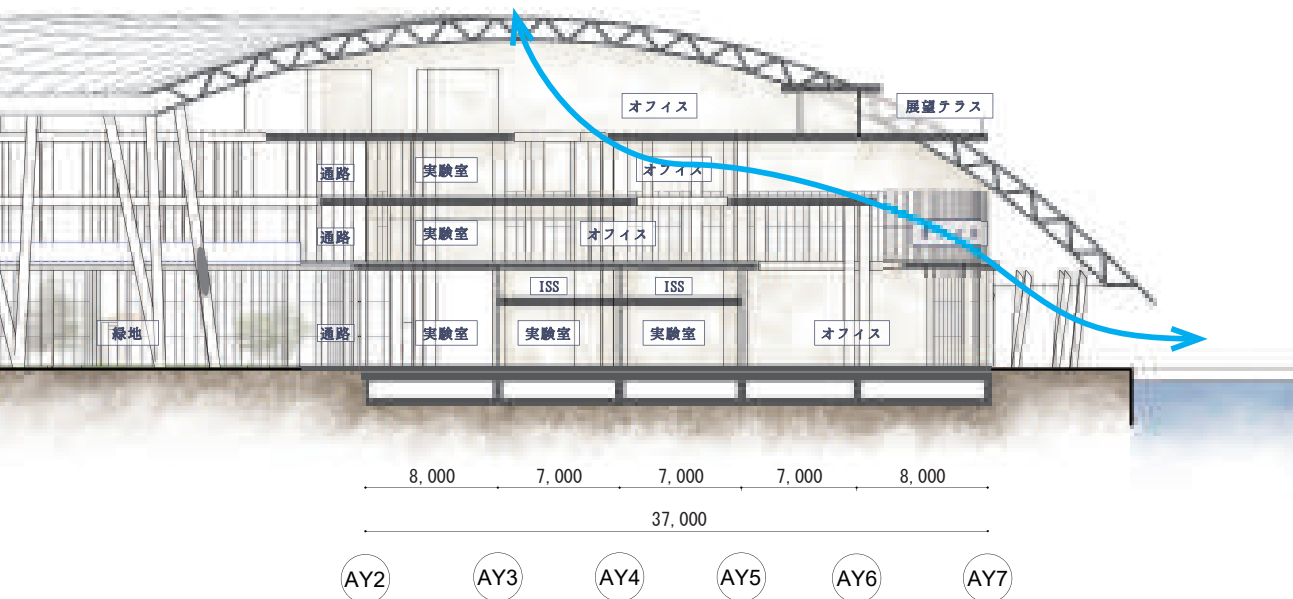
びわ湖と反対側には緑地空間を設け、それぞれに開いた構成とする。より近い距離感で水と緑を感じることで、リラクゼーション効果を生み出します。

[ひな壇状にセットバックするオフィス空間]

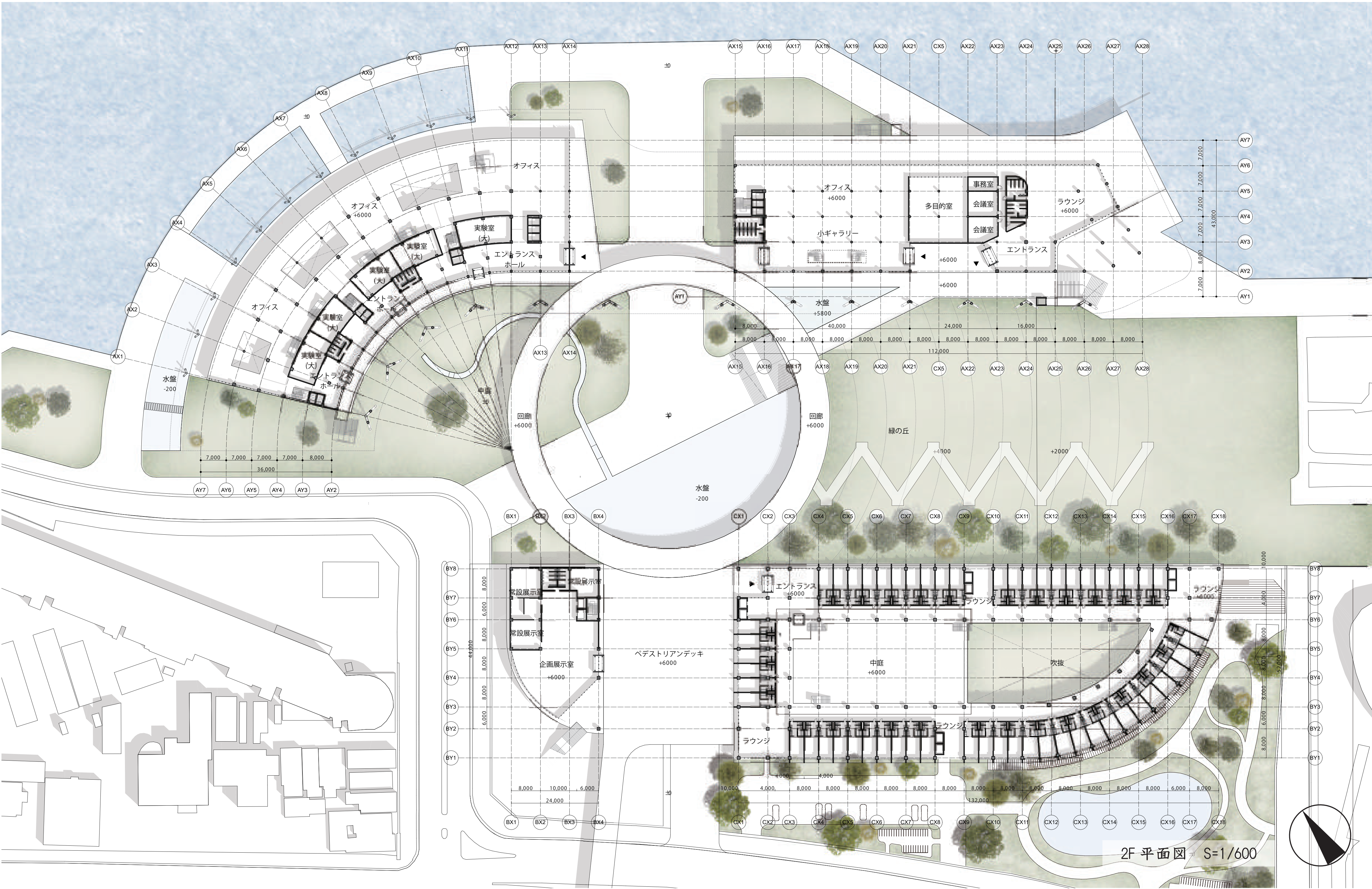


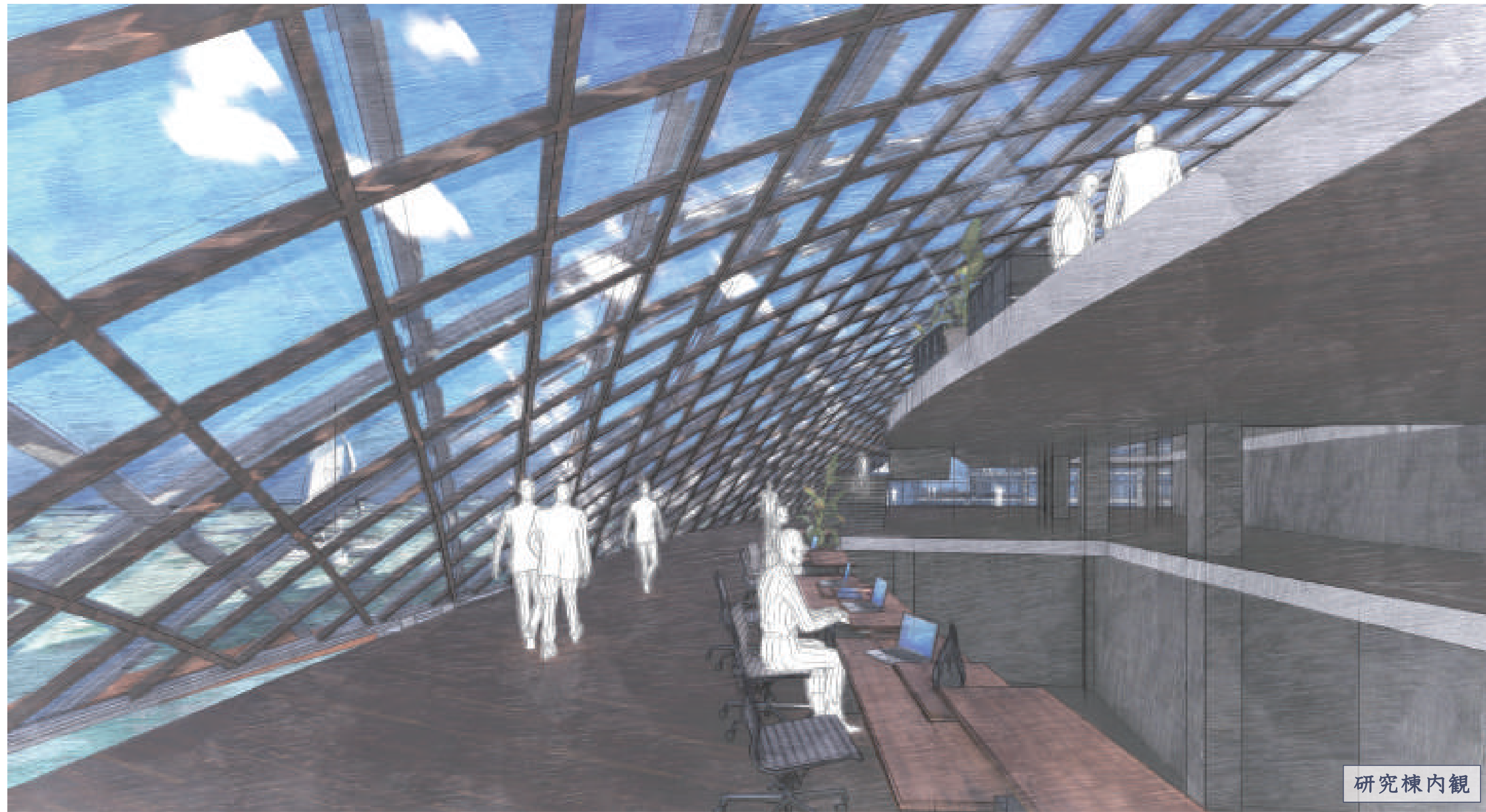
びわ湖側の執務空間をひな壇上にセットバックさせることで、びわ湖に対して開かれた執務空間とする。朝日が昇り、夕方に日が落ちるという一日のサイクルを肌で感じることで体内のサイクルが安定し、より健康的に業務に集中できる環境を整える。

[比叡おろしを取り入れた環境計画]



この地特有の局地風である「比叡おろし」を大屋根の足元から、一階の変ルーバーによって内部に取り入れます。外気を効率よく取り入れることで、ガラスの大屋根空間の空調を制御します。

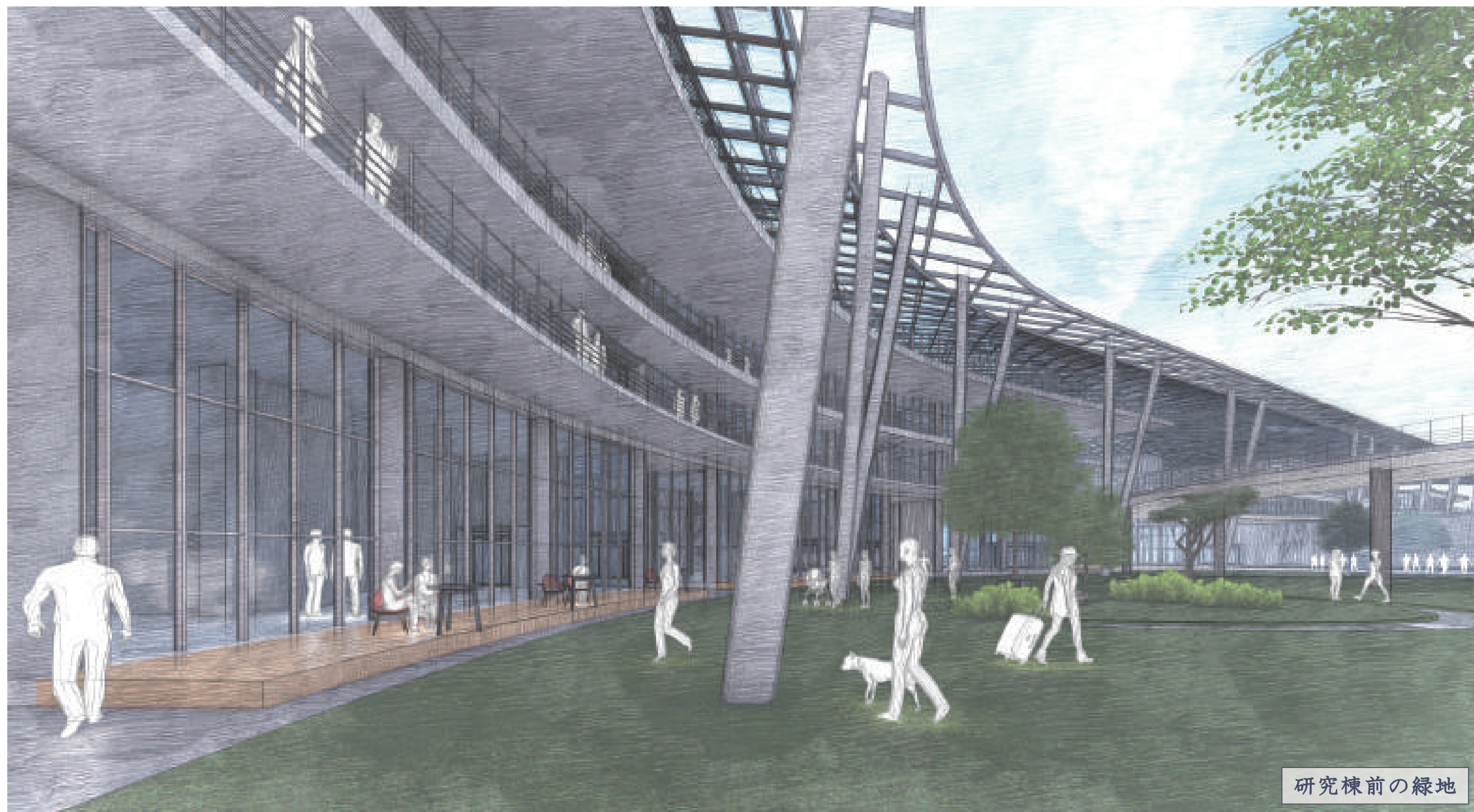




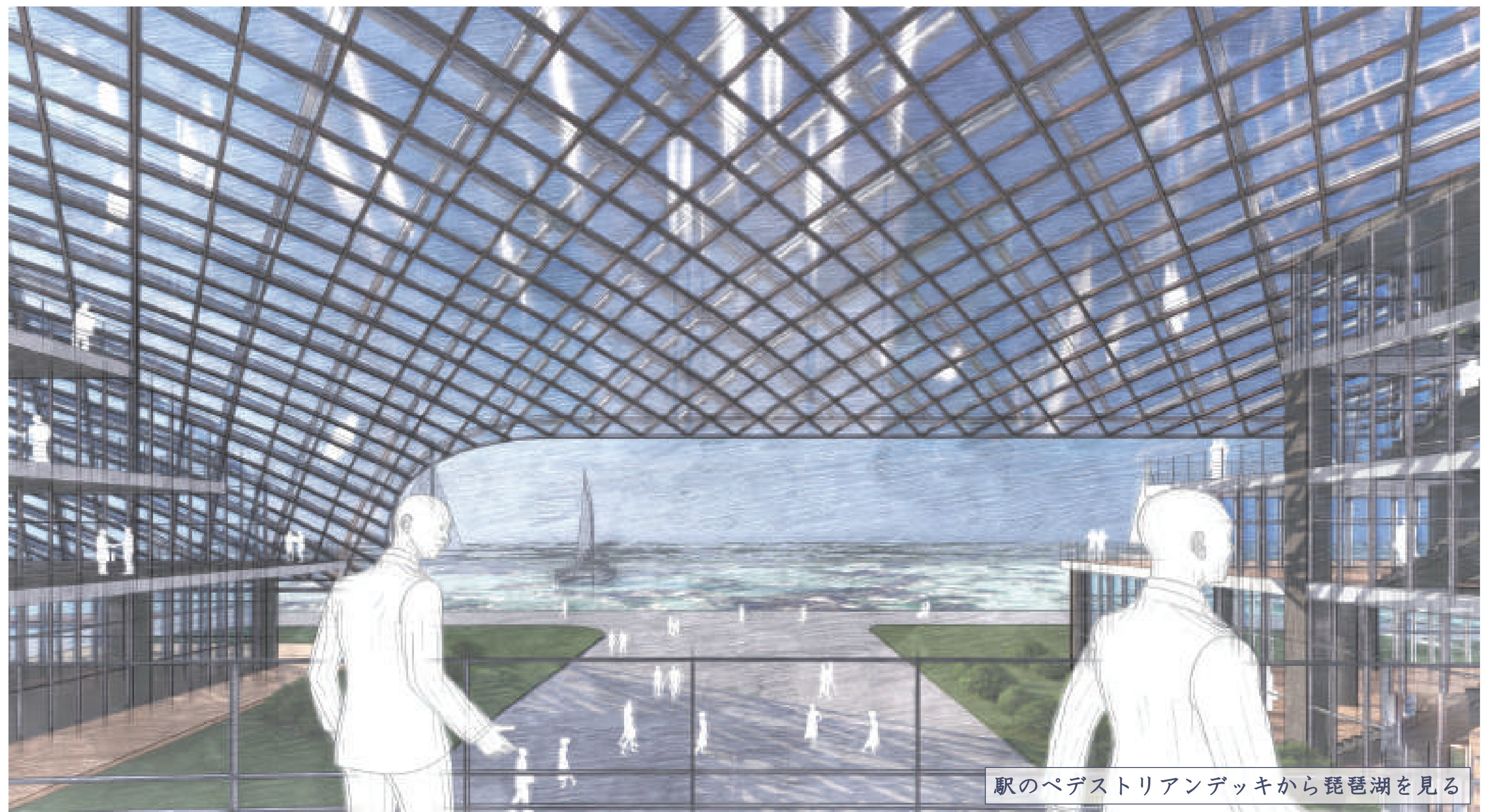
研究棟内観



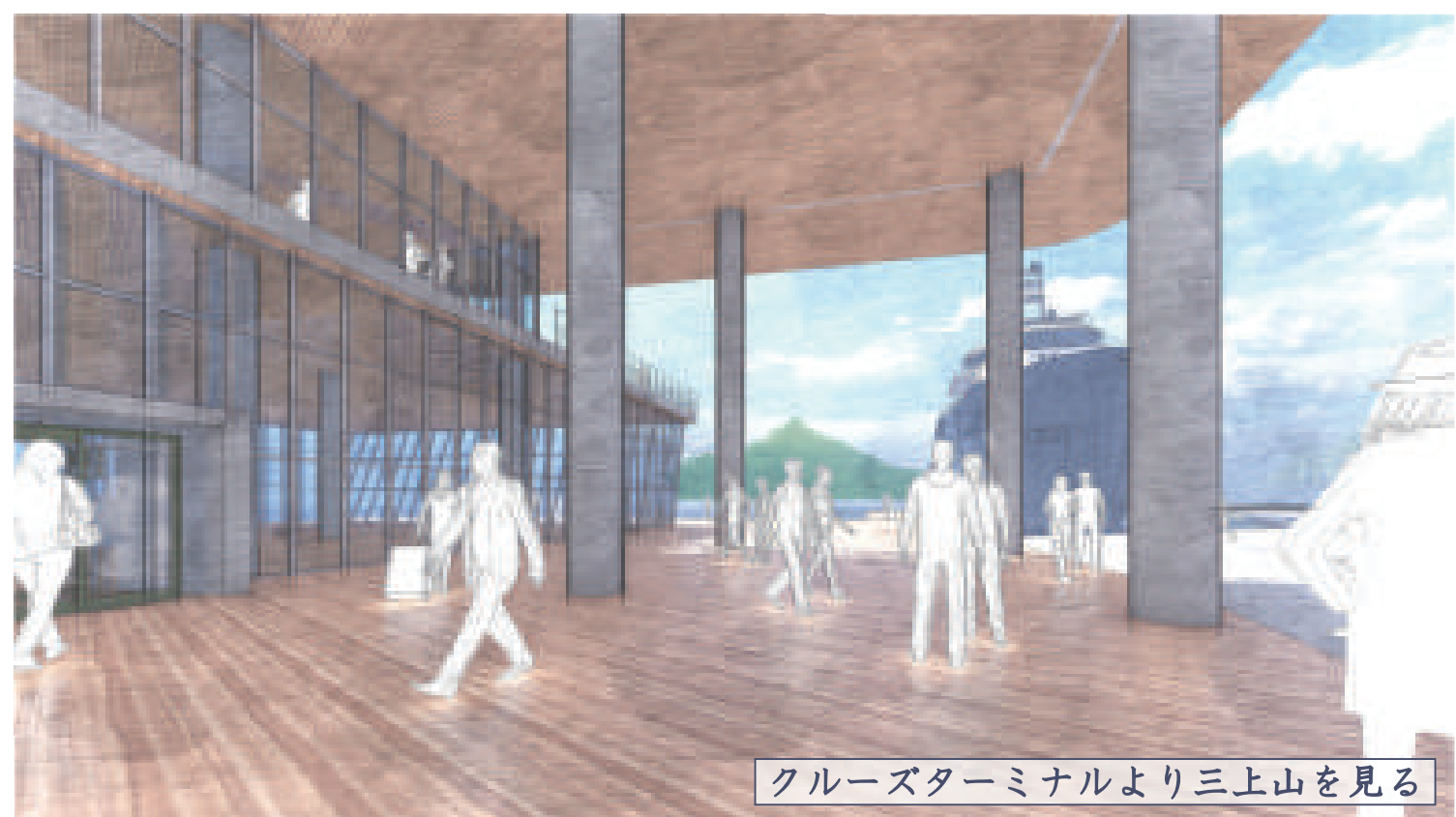
研究棟展望デッキより琵琶湖を見る



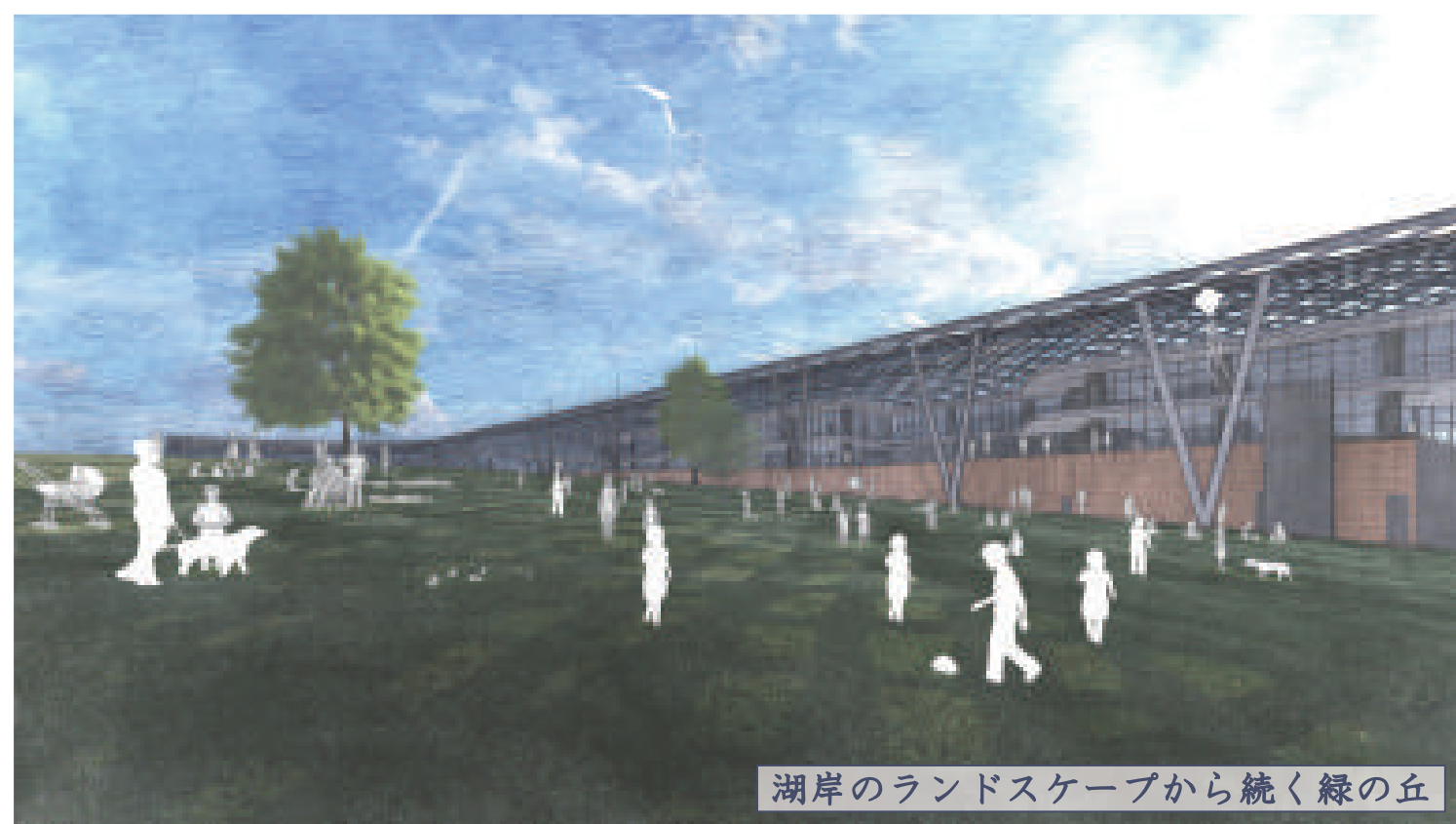
研究棟前の緑地



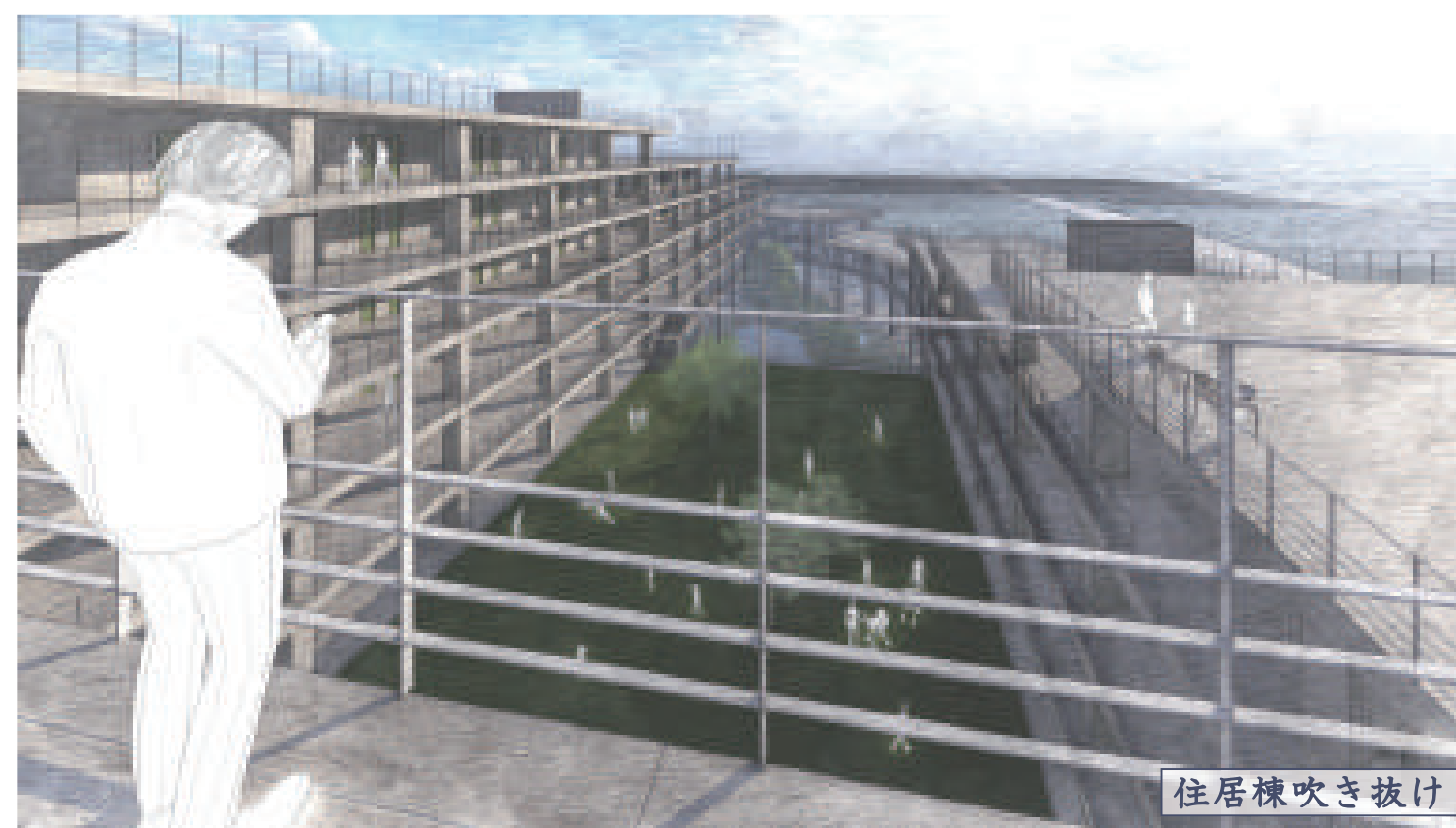
駅のペDESTリアンデッキから琵琶湖を見る



クルーズターミナルより三上山を見る



湖岸のランドスケープから続く緑の丘



住居棟吹き抜け



インキュベーション棟